

私たちの日常では「メディア・リテラシー」という言葉はほとんど聞く機会がありません。この「メディア・リテラシー」が、日本で意識された発端は、1990年代になって、あるNPOにより「カナダの学校におけるメディア・リテラシー教育」が紹介され現在につながっています。

特集

日常生活 ジェ メディア

ばによらない情報の意味を読み解く能力、すなわちクリティカル（批評的）な知的能力や感受性だと思います。そのためには、多様なコミュニケーションメディアについての機能や制度に関する知識と理解も大事になります。

critical（批評的）とはどういうことでしょうか。「批評」というとこの国では、あたかも「批判すること」とか「当事者でもないくせに」といったようなニュアンスがあつて不評なことばですが、そうではありません。また「知的能力」とか「感受性」と言っても学力や学歴など何の関係もありません。

それは、表わされた「意味」について深く掘り下げ、考える作業、と言い換えることができます。

メディアからジェンダーへの気づきを

もともと現代人は、次からつぎへと溢れてくる喋りことば・文字・映像・音などの「意味」について、深く掘り下げ、考える作業をすることが苦手のようです。

たとえば、メディアにおいてことばや映像で語られ（騙られ）ているジェンダーに関し、非対称な女性・男性の別が社会的・文化的に構築されていることに対して、私たちはあまりに「素通り」してしまっていないでしょうか。メディアが垂れ流してきた／垂れ流しているジェンダー表象にクリティカルに接す

ることをしてこなかった結果、ジェンダーは私たちの思考となり身体となり、社会意識となつてしまいました。このようにして構築された性の固定的カテゴリーは、人びとにえらく不自由な状態を強いているように思えます。怒濤（どとう）のように押し寄せる情報に対して思考停止している状態は、現代人の一種の「自衛策」と言えなくもありません。しかし、忙しさ、めんどろくささにとり紛れて、疑問を持つたり分析したり、知的であつたり敏感であつたりすることを放棄してしまうことによつて、私たちの基本的人権や生存権が脅かされる事態が今後ともないとは断言できません。メディア・リテラシーの視点でジェンダーを考えることは、そのための里程標（りていひょう）（到達度）はかる目安）ともなるものなのです。

筆者プロフィール

もろ はし たい き
諸 橋 泰 樹

フェリス女学院大学文学部教授。

2003年～小金井市男女平等推進審議会会長

2007年～日本マス・コミュニケーション学会理論研究部会委員

著書

『雑誌文化の中の女性学』

『ジェンダーの罟』

『季節の変わり目―融解する若者とメディア』

『ジェンダーの語られ方、メディアのつくられ方』

『ジェンダーというメガネ―やさしい女性学』

『ジェンダーとジャーナリズムのはざまで―一季節の変わり目Part 2』ほか多数。